

英語ライティング学習における インターネット利用の可能性について

成 田 圭 市

1. はじめに

インターネットの発展と普及に伴い、従来は図書館などに所蔵された物理的資料にのみ頼っていた情報収集作業が、一気に世界規模へと拡大しはじめている。また、コンピュータの高機能化・低価格化により、個人レベルでも十分なコンピュータ環境が得られるようになった。こうした状況が、研究者にとってのみならず英語学習者にとっても大きな支援となることは言を俟たない。とりわけ英語のライティングに関しては、我々非ネイティブスピーカーが利用できるコンピュータ資源は膨大なものがある。以下本稿では、コンピュータ及びインターネットを英語ライティングに活用する方法とその可能性を思い付くままに論じてみたい。

2. インターネットの利用

インターネットにより、世界中に散在する膨大な情報に個人がいとも容易かつ手軽にアクセスできるようになった。しかも、その双方向性を最大限に活かせば、情報を受け取るのみならず、自らが情報発信者となることも可能であり、内容のある情報を発信する能力を育成することも必要となってきた。そこでの情報の発信も受信も、現在のところ（残念ながら）英語の使用がほぼ必須である以上、これを利用するものは必然的に大量の英語情報を迅速かつ正確に読みとり、また、有意義な情報を正確にわかりやすく英語で書くという能力が要求されることになる。いわゆる「英会話」に代表される音声言語中心の英語教育という最近の風潮からすれば、これは文字言語中心の英語教育への逆行と捉えられるかもしれない。が、これは単なる教室での訳読や英作文とは本質的に異なることに注意したい。インターネットという従来とは全く異なる情報メディアにおける「コミュニケーション」能力の養成という観点からみれば、英語を読んだり書いたりする能力は、聞いたり話したりする能力以上に切実な意味を持ってくるのである。インターネットの更なる普及に伴い、この意味でのコミュニケーション能力はますます重要性を帯びてくるはずである。教室内だけの擬似的英語体験とは異なり、インターネットはいわばダイナミックな現実世

界との架け橋であり、リアルなコミュニケーションを行うことを可能にするメディアである。しかも、価値観や習慣、文化を異にする世界中の人々との情報交換を通して、価値観の多様性や文化の相対性を学ぶ格好の場ともなりうるのである。コミュニケーション能力を養うのに、インターネットはまさに絶好の場を提供してくれるわけである。

以下に、外国語学習におけるインターネット利用の可能性をいくつか挙げてみよう。

(1) 電子メールによるペンパル、あるいはインターネット上のメーリング・リスト (ML) への参加により、「教室英語」という閉じた場ではまず不可能な、実際に英語を使ってコミュニケーションを行う機会が得られる。ペンパルを紹介するサービスはインターネット上に数多くあり、個人ないしクラス単位で参加可能である。既に多くの学校で、英語の授業の一環として電子メールを利用した海外との交流が行われている。従来も、エアメールによる文通の形で英語教育に利用されてきたものだが、電子メールはこの延長線上に位置するものではなく、本質的に全く異なったコミュニケーションであることに注目したい。というのも、手紙による文通は、往復に少なくとも2週間以上かかるのに対し、電子メールでは、ほぼ瞬時にメッセージが相手方に届けられるからである。従って、これを活用すれば、短いメッセージを頻繁にやり取りし合うという「会話」に近いコミュニケーションが図れることになる。英語で手紙を書くとなると、それなりのスタイルに従った堅苦しい文書を準備する手間もかかるが、電子メールでは、カジュアルなメッセージを日常的にやり取りし合うわけで、英語によるコミュニケーションがきわめて身近なものになることが何よりのメリットである。

電子メールを使ってインターネット上に擬似的な会議室を提供するメーリング・リストも、きわめて利用価値が高い。実に多種多様なメーリング・リストが存在するが、中でも The Student Lists (majordomo@latrobe.edu.au) という、英語を外国語ないし第2言語として学習している世界中の学生を主な対象とした、インターネット上の電子メールによる会議室は、英語を実際に使って意志疎通を図るための有益な場を提供している。

(2) 自ら情報を発信するためには、まず、多量の情報を正確かつ迅速に読みとる力を付けなければならない。そのためにも、インターネットを利用して、情報の大海の中から必要な情報を素早く得る能力を養う訓練が必須である。例えば、インターネット上の各種情報サービス (WWW, gopher, newsgroup, etc.)、とりわけ Netscape のような WWW ブラウザを活用することで、お仕着せの「教科書」の英語を訳すという作業ではなく、自発的に自らが必要とする情報を求めて「生きた」英語を大量に読むという作業が学習者に求められる。そこから情報を集めてある論点について英文でレポートを書くというにより、多量の英語を正確に速読する力と、そこから得た情報をもとにしてわかりやすい英語を書くという力が養われる。

これを発展させれば、英語ライティング学習のひとつの目標として、各学生が自分のホー

ムページを英語で作成して世界に向けて発信するという課題を設定できる。読むのは教師（と同級生）のみであった従来の英作文の練習とは異なり、不特定の読者にもわかるような英語を書いて実際に世界中の人々に向けて発信するという試みが、インターネットによりきわめて容易になったのである。

(3) 英米の教育機関の中には、インターネット上に英語学習を支援するようなホームページを設けているところがあり、例えばイリノイ大学の DEIL LinguaCenter⁽¹⁾には、英語のいわゆる 4 技能のそれぞれに対応した様々な情報源へのリンクが張っており、こうしたホームページにアクセスすることで、学生の主体的かつ能動的な英語学習意欲が促される。設問に答えてオンラインで送付すると、自動的に採点して返却してくれるサービスまで行われているのである。また、授業で使う教材やハンドアウトなどが WWW 上に蓄積されつつある事実も重要であり、例えば、アメリカの 40 以上の大学から集められた論文・エッセーの書き方指導 (Academic Writing) のハンドアウトをリストにして公開しているサイト⁽²⁾もある。日本でも、組織的ではなく個々の教員の努力によるものであるが、様々な教材がオンライン上で公開されはじめている。⁽³⁾こうした教材が蓄積されて学生が自由にアクセスできるようになると、従来の注付き英語教科書を用いた教室での一斉授業とは全く異なる学習形態の可能性さえ生じてくるだろう。

(4) 新潟大学の学内 LAN 上に英語学習専用のニュースグループあるいは会議室を開設して、英語学習に関する学生のあらゆる質問にいつでも答えることができるような体制を作る。これには全学の教員ばかりでなく、学生自身もある時には「教師」の立場で参加できるという点で、学生の勉学意欲促進にも通ずる。

英語ライティング学習との関連で言えば、特に上の(1)と(2)が重要である。

まず、電子メール環境が整えば、メールによる課題提出（自己紹介、近況報告、趣味、時事問題などについての自由作文）に利用できる。複数の人に一度に送信できるという電子メールの利点を活用して、教師にだけ提出するのではなく、複数のクラスメートあるいはクラス全員に提出するようにして、必ずそれに対する返事を英語で書かせるという指導法が考えられる。教師も、添削しようとする根性を捨てて、返事を書くだけにする。このような「読み手」からの反応を得ることで、学生の自主的な英作文への取り組みが期待できる。また、教師や他の学生が書いた英語を見ながら自分の英語を改善していくという学習法を学生に体得させることもできよう。こうした方法を、クラス内のやり取りからインターネット上のペンパルないし電子会議室への参加と発展させていくことができる。

従来のような課題提出・添削という紋切り型のパターンでは、間違いばかり指摘するあまり、丁寧に添削すればするほど英語で書くという意欲を殺してしまうという弊害がある。その上、自分で書いた英語の読者が教師（及びクラスの他の学生）のみで、しかも正確さのみに重点が置かれ内容は等閑視されるという、典型的な「教室英語」の作業に終始して

しまう（もちろん、基本的な英作文の授業ではこうしたことも大切ではあるが）。

例えば大学生向け「英作文」教科書には、「昨日京都に行ったのですが、いろいろと雑用があってお寺巡りはできませんでした」といった無味乾燥な練習問題がしばしば見受けられる。学生はこれを辞書と首っ引きで逐語的に英語に置き換え、それを教師が黒板なりプリントなりで訂正・添削するというのが従来の英作文指導の典型であろう。学習者の側の自律的な思考の結果出てきたわけでもないこうした日本語を英語に「訳す」という作業にも、もちろん初歩の学習者にとっては一定の意義は認められる。だが、いやしくも一人前の思考能力を有しているはずの大学生が、自分とは全く関係のない他人の思考を単に英語に置き換えるというだけのいわば他己表現といった作業は、翻訳家を目指す訓練ならまだしも、自己を自分の言葉で表現し他人とコミュニケーションを行うための外国語学習としてははなはだ不十分である。

これに対し、インターネット上での発信を前提とした「英作文」は、相手に向かってメッセージを発するという真のコミュニケーションのためのものであり、英語で表現しようとする学習者の意欲を高めるものと期待される。授業での英作文指導は、英語をどのように書いたか、ではなく、何を伝えようとしているか、が関心の中心となるはずである。もちろん、読む人の立場に立って、自分の伝えたいことをわかりやすく正確な英文で表現することが要求されることは言うまでもない。だが、少しくらいの過ちは気にせずに、できるだけたくさんの英語を書き、また、他の人（ネイティブ・非ネイティブを問わず）の書いた英語をたくさん読み参考にすることで、もっと自由に伸び伸びと英語でコミュニケーションしていく姿勢が身に付くはずである。独りよがりの英語になってしまう危険性もあるだろうが、単なる教室での課題練習とは異なり、実際に生身の相手に向かって書くわけであるから、相手の反応そのものが強力な「教師」となるわけである。これは学習者にとっては何物にも代え難いモチベーションともなろう。

3. メーリングリスト利用の試み

上述したような可能性を目指して、今年度筆者が担当している法学部の「法政演習：English Essay Writing」のゼミ⁽⁴⁾では、試みに、受講生全員（12名ほど）に情報処理センターのアカウントを取得させてメーリングリストへの参加を義務づけてみた。利用したMLは、上で紹介したThe Student Listsの中のINTRO-SL⁽⁵⁾というML初心者向けのものである。電子メールの読み書きの練習を兼ねてMLに学生を馴染ませようという趣旨のMLであり、初めて電子メールやMLに触れる学生には最適であろうと思われたからである。さらに、課題提出や学生間の連絡のために、情報処理センターの協力を得て、ゼミ用のメーリングリストも試験的に運用しているところである。

開始して数ヶ月足らずの現状では、この試みの成否を判断するには尚早であるが、思わ

ぬ落とし穴のために、残念ながらなかなか目論見通りには進んでいないのが実情である。3名の学生を除いては電子メール初心者がほとんどのため、あらかじめ情報処理センターの実習室で2度ほど基礎的な操作法を練習させてみたところ、キーボードで書くことに慣れていない学生が多いことが判明し、これがまず第一のネックとなった。これは筆者には思わぬ誤算だったが、考えて見れば、学校教育でキーボード練習など行われないうのだから、当然といえば当然であった。touch-typingを身に付けない限り、コンピュータを活用するという段階にまではなかなか到達できるものではない。また、情報処理センターの端末で電子メールを利用しようとする、emacsないしmailxを使わざるを得ない点も障害であった。もちろんセンターが簡潔なマニュアルを用意しているが、初心者にとってemacsで作文してメールを読み書きするのは、決して容易な作業ではない。さらに、電子メールは、本来、電話のように手軽に日常的に活用されるべきコミュニケーション手段なのだが、コンピュータを所有していない学生は、わざわざ情報処理センターまで出向かなければならず、これもまた心理的にも物理的にも大きな壁となって、電子メールの活用への妨げとなってしまう。結果として、学生がメールにアクセスする頻度は週に一度くらいとなってしまう、当初目指したようなMLでの積極的な議論参加にはほど遠いのが現状である。

また、INTRO-SLというML自体も、連日10通前後のメールが世界中から流れてくるのだが、初心者向けのためか、なかなか「議論」にまでは至らず、自己紹介を書きっぱなしというケースが多いのが難点である。注5に記したThomas Robbの“Guidelines for Teachers”の中でも次のような架空の例が挙げられている。

A poor introduction:

“My name is Maria. I study English at X university. Please write!”

A better introduction:

“Hello! I see you have been talking about food. I make excellent whirlpool eggs. Can you guess how? Can you guess what country I’m from? Tell me how to make your favorite food.

Youki Naito, XYZ University”

何故前者が“poor”で後者が“better”なのかは参加している学生たちも理解しているはずなのだが、にもかかわらず前者のようなメッセージの比率が高いのである。筆者のゼミの学生にも、自己紹介をポストする事と、週に一度は興味を引かれたメールに対するコメントをポストする事を義務づけたのだが、上述したような不十分なメール環境のせいもあり、また電子メールによる新しいコミュニケーション形態に不慣れなせいもあり、まだまだ道のりは遠いというのが偽らざる実感である。

ただ、既にインターネットのアカウントを持っていた3名の学生は、いとも楽々と日常的に自宅でメールを読み書きしているし、その内の1人は、Student Listsの運営者から複数のメーリングリストに参加するように促すメールを受け取るほどに積極的に議論に加わっている。⁽⁶⁾また、夏休み以降海外に留学している3人の学生は、それぞれの留学先の大学(オレゴン大、カーディフ大、ブリストル大)で早速アカウントを取得してゼミ用のMLにメールを送ってきたりしている。さらに、情報処理センターから週に一度くらいしかアクセスできない学生であっても、ML上で知り合った学生とオフ・リストでメールのやり取りをしているという報告もあった。筆者の力不足や学生が利用できるコンピュータ環境の貧弱さ故に、理想と現実はまだまだ一致していないが、今後コンピュータ環境が整備されて学生が気軽に日常的にインターネットにアクセスできるようになれば、インターネットを中心に据えた英語ライティングの学習も可能になり、従来型の授業形態が根本的な変革を迫られることにもなる。⁽⁷⁾

4. コンピュータの利用

インターネットにアクセスする以外に、コンピュータは英語のライティングにももちろん大きな威力を発揮する。日本語・外国語を問わず、パソコンを使って文書を作成・編集することのメリットを今更挙げる必要はなからうが、特に英語を書くという作業に絞った場合、以下のメリットはいくら強調しても強調しすぎることはない。

(1) ライティング支援のツール類

スペル・チェッカーや簡単な文法チェックソフトが、ワープロソフトに付属して使えるようになっていることが多い。これで最低限の誤りは事前に訂正可能である。スペリングのミスなどは自分でチェックしただけでは不十分なことが多いので、特に非ネイティブの学習者の場合にはスペル・チェッカーは必須であろう。また、定型の手紙や商用文を書く際には、一から書くのではなく、CD-ROMなどに収められた文例集を検索してカットアンドペーストで活用することで、大いに能率が上がる。「英作文は英借文」とはよく言われることだが、実際、このような模範的な雛形を応用して自分なりの英語を書くという方法は非常に有効な学習法である。

(2) 電子辞書・参考書

辞書や参考書の類も、電子化されて非常に使いやすくなっている。マルチウィンドウ環境であれば、作文中に様々な電子辞書やレファレンス類を簡単な操作で手軽に利用できる点も見逃せない。単なる単語帳程度のものから容量600MB以上のOEDまで多種多様だが、英和と和英の中辞典を1枚のCD-ROMに収めたもの⁽⁸⁾をDDWinという辞書検索ソフト(草本和馬さん作フリーウェア)で検索すれば、いちいち書籍版の辞書を机の上に並べずとも、ごく簡単な操作で作文中に手軽に辞書引きができる。ちょっとした英語シソーラス

のように使うこともできるし、「辞書全文検索」の機能を使えば、辞書全体を一つの英語コーパスとして検索することさえ可能である。英語のシソーラスは、同じ単語の繰り返しを避けたり、適切な語を選んだりするのに大いに役立つので、外国人が英語を書く際には必須のツールである。

(3) コーパスの利用

我々が母語である日本語について反省してみればすぐわかるように、ネイティブであってもあらゆる表現に関して常に的確な判断が下せるとは限らず、曖昧な判断になってしまうこともある。また、自然な英語の文章を書こうとすれば、適切な修飾語とか目的語に応じた動詞といったコロケーションに十分に気を配る必要がある。辞書や参考書を調べるのも一法だが、得てして辞書や参考書の類では調べきれない場合が間々ある。こうした場合に、大容量の英語コーパスで該当の表現を検索してみることで、その表現の適否や用法を確かめることができる。

現在では、様々な英語テキストの電子化が進んでおり、比較的安価な CD-ROM で英語の新聞や雑誌、文学作品などの膨大なテキストコーパスが入手できるようになっている。また WWW 上でも映画やテレビの台本、新聞・雑誌記事、文学作品などのテキストが公開されており、こうしたファイルを集めることで個人用のコーパス作成がきわめて簡単に実行できる。自前のコーパスを用意しておけば、英語で文書作成中に疑問が生じる度に、文字列検索ソフトや KWIC などのツールを活用して必要な表現を検索することができるのである。

ただ、こうしたコーパスはかなり膨大なものになるので、個人で作成するよりはむしろ、ネットワーク上で公開されて誰でも自由に利用できるようになってるのがより望ましい形である。⁽⁹⁾この点で、有料ではあるが、2億語以上の書き言葉・話し言葉のコーパスである The Bank of English (Collins COBUILD) のオンライン検索サービスなどは、是非とも情報処理センターあるいは図書館が契約して、全学的に利用できるような環境を作ることが望まれる。

辞書検索・コーパスによる文字列検索や KWIC・文法チェックないし校正ソフトを適宜使用しながら、エディタないしワープロソフトで英語を書くというのは、個人レベルでも実現可能な最低限の英語ライティング環境である。学習者が英語を書く際に、紙に向かって一から書き始めるのと、こうした環境を自由に利用できるのとでは、能率の面でも正確さの面でも大きな差が出てくるはずである。

5. まとめ

本論では、主にライティングに的を絞ってコンピュータやインターネット活用の可能性を概観した。コンピュータ技術の発展は目覚ましいものがあり、リスニングやスピーキング

の学習に応用できる様々な CD-ROM 教材⁽¹⁰⁾や、インターネット上で会話を交わすことのできる Internet Phone, CU-SeeMe などのソフトウェアも出現してきているが、本稿では触れることはできなかった。

最近とみに教育に対するインターネットの効用が説かれるようになってきたが、もちろんインターネットが万能ではあり得ないし、またそれだけで外国語学習は全て事足りると主張するつもりも毛頭ない。あくまで、外国語を学びそして実践の場で訓練するための一つ的手段に過ぎないの言うまでもなからう。ただし、きわめて有効な手段である点はしっかりと認識すべきであるが。一人の教師が教室で一年かけても到底提供しきれないような豊富な言語材料を「生きた」形で与えてくれる点でも、また、生身の相手に向かって英語で実際にコミュニケーションを行う場を提供してくれる点でも、インターネットの果たす役割には大きな期待がかけられるのである。

インターネットを英語教育に利用するというのは、それが便利だからということ以上に、外国語教育のありかたを見直すきっかけを与えてくれるという点に大きな意義があると思われる。英語の「運用能力」のうち「書く」という能力に限って言えば、辞書・参考書を調べたり図書館を利用したりする能力と同様に、コンピュータを駆使してインターネットにアクセスしたり、文書作成支援のソフトウェアを活用したりする「コンピュータリテラシー」「インターネットリテラシー」も当然その能力の一部と考えるべきであろう。この点で英語教育と情報処理教育とは限りなく接近せざるを得ないのであり、また、こうした視野の中で今後の英語教育を考えることが必要であると思われる。本論で述べたようなコンピュータやインターネットの可能性を学習者が享受して自主的に学習できるような環境を整備すること、またその環境を学習者自身が整えるのを援助すること—これらも当然教師や大学が積極的に取り組むべき課題とすべきである。教師にはある程度のコンピュータやインターネットの知識が要求されようし、また、学内ネットワークの充実や学生が24時間利用できる使いやすい端末の整備も求められよう。

注

*本論執筆に当たっては、英語教育関連のメーリングリスト (eflj, jaltcall, net-lang) に投稿された多くの方々のメッセージが非常に参考になりました。記して感謝します。

1. <http://deil.lang.uiuc.edu/>.
2. <http://www2.colgate.edu/diw/NWCAOWLS.html> # Handouts.
3. 例えば、名古屋大学の杉浦正利氏 (<http://lang.nagoya-u.ac.jp/~sugiura/>) や、東海大学の朝尾幸次郎氏 (<http://bosei.cc.u-tokai.ac.jp/~kojiasao/>) など。
4. <http://www.cc.niigata-u.ac.jp/~narita/housei.html>に簡単な紹介がある。
5. 1994年にオーストラリアの La Trobe 大学で開始されたメーリングリスト。初心者向けの INTRO-SL の他に、英語、音楽、映画、スポーツなどを話題にする10の ML がある。運営者の

- 一人, Thomas Robb が書いた "International Student Discussion Lists: Guidelines for Teachers" (<http://www.kyoto-su.ac.jp/people/teacher/trobb/slhowto.html>) に詳しい紹介がある。
6. この学生は, 自分の出席した法学部の集中講義の概要を, 連日英語で ML に流したほどである。
 7. 現在新潟大学総合情報処理センターでは PPP 接続を24時間運用しているので, センターのアカウントを有している者は, コンピュータとモデムさえ用意すれば, 電話回線経由でいつでもインターネットにアクセスすることができる。接続方法等の詳細はセンターの石垣健一さんが「センターニュース」No.136 (1996. 4) に紹介している。
 8. 具体的には, 「CD-ROM 版新英和和英中辞典」(研究社) がこれに該当する。また, 「リーダーズプラス (EPWING CD-ROM 版)」(研究社) は, 英和辞典ながら, 訳語にも検索インデックスが付与されているため, 和英辞典やシソーラスとしても重宝する。例えば, 「情報」を検索キーワードに指定すると, 前者では和英辞典の見出しに立っている「情報」の項目1件だけが引かかるのに対し, 後者では, information のみならず, intelligence, knowledge, news, tip, note, line, griff 等々「情報」を語釈中に含む38項目が検索される。
 9. ペンシルバニア大の Linguistic Data Consortium (www ldc.upenn.edu) では, 100万語のいわゆる「ブラウン・コーパス」のオンライン検索サービスを無料でやっている。
 10. 未見だが, 本年10月に出版予定の筒井脩『英語学習のための CD-ROM 入門』(大阪教育図書) が参考になろう。また, インターネット上で発行されている TESL-EJ (Teaching English as a Second or Foreign Language: An Electronic Journal) という英語教育学の雑誌 (<http://cc2000.kyoto-su.ac.jp/information/tesl-ej/index.html>) にも, 毎号英語学習用 CD-ROM 教材のレビューが掲載されており参考になる。